



群馬県コンクール 金賞

私の教科書

玉村町立玉村中学校 2年 萩原 佳央

私が七歳の夏のことです。祖父から稲の苗を二束渡されました。祖父の大きな柔らかい手の中で弱々しそうで、今にも倒れそうな小さな苗。私は泥の入ったバケツの中に植えました。そして太陽がいっぱい当たる玄関口に置かれました。

苗は、日に日に大きくなっていきました。私は授業を受けている間も、給食を食べている時も、友達と遊んでいる時も、いつも苗のことが気になっていました。

そんなある日のこと、私は不思議なものを発見しました。苗の先端に何か白っぽい異様なものが点々と付いていたのです。

「病気になっちゃったのかな？」

と思い、動揺した私は、一目散に祖父のところに駆けて行きました。祖父は私の下手な説明を一生懸命聞いてくれました。そして、

「大丈夫だよ。」

と言い、やさしい笑みを浮かべました。それを聞いて、ホッとしたと同時に、白いものの正体を何度も祖父に聞きました。

「そのうち分かってくるよ。」

祖父はその度に答えていました。

九月末頃になると、その正体が稲穂になる前の花だったことが分かりました。

十月末になると、あちこちの家で稲刈りが始まりました。我が家の稲刈りは、祖父、祖母、父、母、私の総勢5人で行われます。祖父と父を中心として、穂がなくなった藁を田んぼの輪郭に沿って並べます。

「この藁は家族の絆みたいだ。」

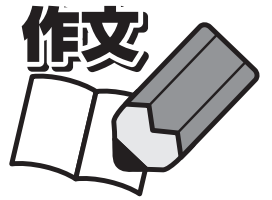
と私は思います。

私の育てた稲は我が家の稲刈りが全て終了した後に、一本の稲は祖父によって鎌で刈られ、もう一本の稲は、私の手によって大きなハサミで刈られました。幾百もの実がもう少しで落ちそうになるくらいに成長した黄金色した稲を、私は泥まみれの手で強くグューツと握り締めました。なんだか熱く感じました。刈られた稲は、

「佳央が作った米だから『かお米』だな。」

と祖父が名付けてくれました。

数年前の七月の朝、いつもより早く目覚めた私は、気晴らしに田んぼの周りを歩いていました。すると、田んぼの中に、サンドウィッチやサラダ、ジュースなどが捨てられていました。すぐに私は、裸足になり、田んぼの中に入り、それを取りました。土がドロドロで思うよう



に動けませんでした。何とか拾い上げることができました。ずっと見ていた近所のおじさんが

「君は、偉いねえ。」

と言ってくれました。でも私は、別に偉いことをしているのではなく、私にとって当たり前のことでした。ただ、ゴミを捨てた心ない人たちへの怒りがこみ上げてきました。

私たちの食料は、人の手はかかっているけれども自然の恵みであるということを私はいつも意識しています。祖父から渡された二束の苗により、私の中の何かが変化しました。祖父が名付けてくれた「かお米」は単なる米ではなく、私の魂が入ったお米です。おおげさかもしれないけれど、私にとってはかけがえのない特別な生命でした。農家の方々は、あの夏の私のように、何をしてもどんな時でも忘れずに稲と心を一つにして育てていらっしゃるのだと思います。

祖父は、体験の中から、時には自然の中から、様々なことを教えてくれます。祖父は私にとって教科書です。祖父の生き方そのものが私にとって大切な学習です。今日も家に帰ったら、祖父と色々な話をしようと思います。色々なことを教えてもらって自分の人生を豊かなものにしていけば、祖父は心から喜んでくれるのではないかと勝手に思っています。私の初めての田植えは田んぼを通じて自然に関心を持ち、その恵みや関わってくださっている方々に感謝する機会の一歩となりました。

